

<前回>オリエンテーション・導入

授業スケジュール

前期：初期キリスト教から古代キリスト教

オリエンテーション——キリスト教思想史について

1. キリスト教の成立と初期キリスト教
2. キリスト教の制度化と初期カトリシズム
3. ヘレニズムのユダヤ教
4. グノーシス主義
5. キリスト教教父 1 ——使徒教父、弁証家 5/26
6. キリスト教教父 2 ——オリゲネス、アレクサンドリア学派 6/2
7. キリスト教基本教理の形成 6/9
8. キリスト教の国教化 6/16
9. キリスト教教父 3 ——アウグスティヌス 6/23
10. 研究発表・角元 6/30
11. 研究発表・岡田 7/7
12. 研究発表・長岡 7/14
13. 研究発表・山本 7/21
14. 研究発表・金 7/28

<グノーシス>

1. 古代の思想運動・宗教運動としてのグノーシス

二世紀から四世紀頃にかけて、正統キリスト教会と競合関係にあった宗教運動（キリスト教内あるいは外、異端あるいは異教）の総称（単一の運動体ではない。多様の神話体系）。エリート主義的傾向の「グノーシス」（認識、知識→高次の真の知恵）を探求する古代に広範に見られる精神動向の一翼を担う。正統キリスト教（パウロ）もこの動向と緊密な関係にある。

1) 年代：二世紀以降

2) 起源 「グノーシス」とは明らかに古代の教養都市の中でキリスト教を時代の水準において説明しようとする相当教養ある人びとの試みから成立した。そのさい、ユダヤ・ヘレニズム的思想家が受容していたものを同時代の通俗哲学から彼らは引き継いだ。」(112)

3) 展開・広がり：「イラン・マニ教型」「東方型」／「シリア・エジプト型」「西方型」

2. 普遍的な精神類型としてのグノーシス

3. 「グノーシス主義はそれに固有な *Daseinshaltung* に基づく創作神話を伴うが、その本質は次のような三つのモチーフによって形成されている。(1) 究極的存在と人間の本来の自己は本質において一つであるという救済の認識、(2) その前提としての反宇宙的二元論、(3) その結果として要請される、「自己」の啓示者あるいは救済者」(350)

墮落神話＋救済神話

4. 資料について（マルクシーヌ、47-90）

ナグ・ハマディ文書発見の意義

5. 正統キリスト教との競合、最大のライバル、キリスト教との共通性

・パレスチナからヘレニズム大都市へ：「二世紀という時代はある種の実験室」

「宗教市場において教養高い同時代人にキリスト教とその特有の世界観の便益を理解できるものとし、こうしてキリスト教を競争力のあるものとしようとする試み」「習得可能な範囲で聖書文献学や哲学的議論のような同時代の学問的方法をもちいて、時代の宗教的な

大問題に向けてキリスト教的な解答を与える努力」「多くの教養人の意見に従って欠落していると考えられる部分について聖書物語を完成させる神話を語ろうとする試み」(155)

6. 争点、神話と歴史

- ・歴史的事実としてのイエスの意義と歴史的事実としての十字架・復活
- ・創造の善性、神の唯一性（二元論に対する一元論）

7. ヨーロッパ精神史の多層的理解、異教は過ぎ去ってはいない。

現代の異教としてのグノーシス・タイプの新宗教

5. キリスト教教父 1 ——使徒教父、弁証家

(1) 使徒から使徒教父へ

1. 「使徒時代に直ちに続く時代を「使徒直後時代」と呼んでいるが、その時代におけるキリスト教思想の本流と思われるべきものは「使徒教父」の思想である」、「ただし「使徒教父」という呼称は十七世紀に初めて用いられたもので、使徒たちと直接の交渉を持った教父たちの意味である」、「内容的には、一世紀末から二世紀前半における異邦キリスト教の所産としての一群の文書を指している。新約聖書中の諸書と使徒教父の諸書との間には時代的に相重なる部分もあるが、概して言うなら使徒教父は新約につづく時代に属している」(有賀、98)

Patres Apostolici

2. 「十二使徒の教訓（ディダケー）」、「バルナバの手紙」、「クレメンスの手紙（第一）」、「クレメンスの手紙（第二）」、「イグナティオスの手紙」、「ポリュカルポスの手紙」、「ポリュカルポスの殉教」、「パピアスの断片」、「ディオグネートスへの手紙」、「ヘルマスの牧者」(『使徒教父文書』所収)

3. 使徒教父の歴史的背景：ユダヤ教との関係、ローマ帝国との関係

第一次（66-70）と第二次（132-135）のユダヤ戦争

課題：殉教精神、異端との対決、初期カトリズムへ（信仰告白の成立、教職制の確立）

4. 先行・隣接の宗教（とくにユダヤ教）から、イエスの出来事を解釈するのに必要となる象徴概念を受容・改変

メシア、人の子、ダビデの子、神の子、キュリオス、ロゴス

↓

テオロギア・クリスティ：「神についてと同じようにキリストについて」

イエスにおける神性の経験

↓

唯一神論との関係づけの課題

後に体系的な解決を必要とすることになる。

5. 主要な教説

- ・「無からの創造」、全能の神

「ヘルマスの牧者」の「第一にまぼろし」：「天に座し、無から有を創り、それを聖なる教会のために、ふえ広がらせたもうた神があなたのことを怒っておられません。」

- ・「神の救済の経綸（オイコノミア）」、キリストの先在、霊キリスト論
- ・聖餐論（イグナティオス）

6. 殉教者イグナティオス（佐藤吉昭『キリスト教における殉教研究』創文社）

・「イグナティオスは殉教が直ちに「神に至る」道であると考えており、それはまた当時のキリスト者たちの通念でもあった。普通の死と異なって、殉教死はキリストの受難に文

キリスト教思想研究入門——古代から宗教改革

字どおり与ることである。したがって殉教者は死後の中間状態を経ることなく、直ちに神のみまえに出ることができるというのが、かれらの信仰であった。」（有賀、108）

・「彼が排斥している異端には二種類」、「ユダヤ主義を非難」、「仮象説」「仮現説」への批判。「イエス・キリストが真実に誕生し、真実に受難し、真実に死に、真実に復活したということである」（109-111）

・「アンティオキア教会」への責任、「単独司教制」「エписコポス」は「神の代わりに」教会における主座を占める」、「普遍的教会としての〈ヘー・カトリケー・エクレシーア〉は、イエス・キリストのいますところなら、どこにでも現在する。その普遍的教会の具体的顕現が地域的教会である」（112）、「感謝の祭」（エウカリスティア）としての聖餐」（112）

7. 終末の遅延→制度的倫理的な規定の整備（新律法主義） cf. パウロ書簡と牧会書簡「ディダケー」：生命の道と死の道とにかかわる倫理的教訓、教會的諸行事に関する規則（バプテスマ、断食、祈祷、聖餐）、使徒・預言者について、同信旅行者への待遇について、日曜礼拝について、職制（エписコポイ、ディアコノイ）について、終末論的警告。

（2）使徒教父の役割

迫害下の状況における正統教会への道。

8. 初期キリスト教から初期カトリズムへの歴史的展開（制度化・正統教会形成）のプロセスにおいて、キリスト教を担ったキリスト教指導者。正統キリスト教から逆に歴史を遡及するときに、確認できる教会指導者たち。

ヘレニズムのユダヤ教やグノーシスなどが競合する思想状況で、後の正統キリスト教へと展開する方向性を示している。

（3）キリスト教弁証の意義

9. 「二世紀の弁証論者のもとにひとは、ユダヤ教的・異教的環境世界による、もしくはローマの国家権力によるキリスト教へのとく知られた中傷と迫害に対して、はじめて文書による抵抗を示したキリスト教思想家のことを理解している。」（ヴァイシュラーク上、157）

「告発は二つあった。第一は、キリスト教は帝国の構造の基盤を危くすることによってローマにとって脅威であるという政治的告発である。第二は、キリスト教は哲学的断片をまぜ合わせた一つの迷信であるという哲学的告発であった。」（ティリッヒ、65）

「キリスト教の弁証への試みは宣教の始めからすでになされていたと言っている。パウロの思想もヨハネの神学も福音の弁証から生まれたものである」「イエス・キリストとその十字架」「を福音として人に伝えるためには説得力のある説明がなされねばならない。それが弁証である。」（有賀、133）

→ 古代の弁証家と弁証一般

10. 「クアドラトス、アリストイデス、殉教者ユスティノス、タティアノス、アテナゴラス、アンティオキアのテオフィロス」（クラフト、350）

11. タティアノス (Tatianus)：ユスティヌスの弟子。「ディアテッサロン」(Diatessaron)のいう「調和福音書」の著者。シリア教会で5世紀まで使用。

12. 「弁証学者たちの「哲学」は、覚知主義者たちの説いたグノーシスと異なって、キリスト教の基本信条である創造神の信仰、神の子の受肉としてのイエス・キリスト、その十字架、死、復活、再臨、および最後の審判、肉体の復活と救われた者に与えられる永遠の生命などを否定したのではなく、ただ能うかぎり哲学的にそれらの合理性を弁明しようとしたものであった。」（有賀、137）

(4) ユスティノス(Justinus Martyr, --165)

13. 「プラトニズムとストア哲学を全面的に棄てたのではなかった。キリスト教の信仰に一致し、またその弁証に役立つと見られた教理は、かれも用いているのであり、したがってアリストテレスの場合と同様、かれの神論も多分に哲学的一元論の性格を帯びている」、「かれの神は人格神であるに違いないが、しかしそれは擬人的神観ではない。旧約聖書には擬人的表現が用いられているが、かれによれば、それは比喩的に解さるべきものである。」(135)

14. ロゴス・キリスト論

「神は超越的な「名称すべからざる」究極者」、「究極者から」「ロゴスが生まれた」、「この「生まれたるもの」として第二神ロゴスが万有創造に際して父なる神のために動作者となり、またアブラハム、ヤコブ、モーセ等に現われて神の意志を伝達したのである」、「そのロゴスが人になって現われた者がイエス・キリストである。そのロゴスの働きはイスラエルの範囲に限られていない」、「人間にはすべて「ロゴスの種」または「種子的ロゴス」が宿っている」、「キリストはロゴスそのものとして、哲学者たちに優っているが、両者は全く別の真理を示しているのではなく、ただ真理啓示の完全・不完全の差異があるのみである。」(136)

↓

15. キリスト教のギリシャ化(ハルナック)? あるいはギリシャのキリスト教化?

学問的神学としてのキリスト教思想、しかし、キリスト教的視点から選択が行われた。これ自体がキリスト教形成の一つのあり方ではなかったか。

弁証家の方法としての「相関の方法」(ティリッヒ)

16. 宗教多元性におけるキリスト教(古くて新しい問題)、包括主義?

「キリスト者が自らの宗教を他の誤った諸宗教と並んで存在する——たとい真正の宗教であっても——一つの宗教であるとは見なさなかった」、「彼はキリスト教を完全なロゴスの出現のなかに基礎づけた。つまりキリスト教は、すべての宗教の否定克服であり、まさにそのようなものなるがゆえにすべての宗教をそのなかに包括しようところの普遍的真理の時間空間における出現に基礎づけられるのである」(ティリッヒ、70-71)

「彼のなかにあらわれた基本的真理がその本質において普遍的なものであり、したがってその他のあらゆる真理をそのなかに含意するものであることを意味する」(71)

<参考文献>

1. 『使徒教父文書』《聖書の世界》新約II別巻4、講談社。
2. 『中世思想原典集成』平凡社。
3. 『キリスト教教父著作集』全22巻、教文館。
4. 『キリスト教古典叢書』創文社。
5. H. クラフト『キリスト教教父事典』教文館。
6. 小高毅『古代キリスト教思想家の世界 教父学序説』創文社。
7. 有賀鐵太郎「使徒教父」「教父哲学」『信仰・歴史・実践』著作集6、創文社。
8. 水垣渉『宗教的探求の問題』創文社。「第二部 ユスティノスと探求の問題」
9. 柴田有『教父ユスティノス キリスト教哲学の源流』勁草書房。
10. ティリッヒ『キリスト教思想史I 古代から宗教改革まで』著作集別巻二、白水社。
11. H・チャドウィック『初期キリスト教とギリシア思想』日本基督教団出版局。
12. K. バイシュラーク『キリスト教教義史概説』上下、教文館。
13. 芦名定道『自然神学再考』晃洋書房。

「第一章 古代キリスト教神学の成立と自然神学」